

特集

台湾の高等教育における卒業制作・研究

台湾では、一九六〇年代以降、高等教育において日本関係の専門学系の設置が認められた。以後、「日本語文学系」「東方語文学系」「応用日語学系」、そして「日本語言文化学系」といった名前を冠した学系が多く設置され、現在に至っている。

そうした学系では、日本語および日本関係の各種学問・技能の習得が目指された。だが、台湾の他の諸学系の多くがそうであるように、教師による上からの知識の伝授を重視する傾向が強かったといっていよう。それは、戦後台湾における様々な政治・社会・経済・文化的背景が介在した結果であったと考えられる。さらに近年では、成果主義がもとめられるなか、学生自身の主体性を涵養する教育が、しばしば軽視される傾向がないともいえないだろう。だが、本来、グローバル化やIT化等の進行する現代社会においては、社会と文化の主体的な担い手たりうる人間の養成がますます重要になるはずである。むしろ、知識の上からの伝授の重要性に変わりはないが、これからの台湾の高等教育では、それに加え、学生自身による主体的・能動的な表現・発信力の涵養が重要になってくるといえよう。

こうした認識から、東海大学日本語言文化学系の大学部では、2010年度から「専題研究」と称する必修課目を設置し、卒業条件として論文あるいは作品の執筆・製作を義務づけることにした。本学科では、社会実践に役立つ言語能力を養成するために、教育目標を専門化し、「言語領域(言語・コミュニケーション)」、「文化領域(表象文化・社会文化)」を設けており、専題研究をその総仕上げとして位置づけることにしたのである。開始して二年あまりの制度であるが、実践にあたっては、様々な成果と課題が同時に発生してきた。

特集

むしろ、こうした試みは東海大学日本語文化学系が始めたものではなく、台湾の教育界にあっても、従来から、多くの日本関係学系が実践してきたものである。たとえば現在の台湾の日本関係学科のうち、「専題研究」および「実務専題」を必修科目としているところは少なくとも21箇所にもぼる。とくに台湾南部の比較的歴史の浅い学科に多く、北部の伝統校に少ない傾向にあるようである。卒業論文や作品が、学科の目に見える「教育成果」の証拠として提示しやすいという背景もあるのかもしれない。

だが、そこで発生したさまざまな成果や利点、そして問題点や矛盾、課題と展望については、多くの場合、各学系内での討論の議題とはなっても、より開かれた公共の場での議論の対象とされることが少なかったのではないだろうか。

『多元文化交流』第五号は、台湾の高等教育における「〈制作〉〈研究〉」についての、そうした公共的な議論の場を「特集」として設置したい。東海大学日本語文化学系でおこなわれた二年間の実践、そして台湾の他の日本関係学系でのこれまでの試みの歴史を報告しあい、そこで成果や課題について考察する。これを通じて、高等教育における「〈制作〉〈研究〉」のもつ歴史的背景と普遍的な意義、そしてこれからの課題と展望について、認識を深めることができれば幸いである。